



とやま、祭り彩時季【一】

おわすが如く 山鉾屋台百景 写真・文／木原盛夫

とやま、祭り彩時季【一】

おわすが如く 山鉦屋台百景 写真・文／木原盛夫



CONTENT

- 祭りの原風景 おわすが如く・・・ 4P
- 山・鉦・屋台百景
 - ・降臨した神霊を乗せて巡行する曳山・18P
 - ・動く曳山 動かぬ築山・・・ 60P
 - ・神の依り代となった子供が演じる・・・ 67P
 - 出町子供歌舞伎曳山車祭
 - ・情緒溢れる庵屋台・・・ 71P
 - ・傘鉦と旗頭・・・ 79P
 - ・行事の夜高と神事の夜高・・・ 87P
 - ・美しい行燈ではなく・・・ 107P
 - 巨大化する方に進んだ松明
 - ・神の依り代としての太鼓台・・・ 116P
 - ・トラックをデコレーションした・・・ 122P
 - 屋形船
 - ・安永の曳山騒動と津幡屋与四兵衛・・・ 128P
 - ・宵祭と山宿・・・ 134P

○祭りの原風景 おわすが如く

お鍛さまという行事がある。お鍛さまは、農家の仕事始めの日である1月11日に、三つ鍛を田んぼの神様（男神）、平鍛を畑の神様（女神）に見立てておもてなしする風習で、380年ほど前から岩稲の農家で伝承されてきた。しかし、農業の近代化や担い手不足でこの風習をやめる農家が多く、現在は本芳彦弘さんの家だけになってしまった。

「お鍛さま、あけましておめでとうございます。昨年中はお鍛さまのお力添えをいただきまして、農業に携わることができまして、本当にありがとうございました」とお礼を述べてから、おもてなしが始まる。お鍛さまとの会話は彦弘さんのアドリブで、毎年変わるそうだ。「足を崩していただいて、ごゆっくりとお召し上がりいただきたいと思います」と言ってお鍛さまにすすめる料理は、田作り、黒豆（マメマメしく働けるよう）、海老（腰が曲がるまで働けるよう）、昆布巻き（よろこぶ）、鯛の塩焼き（めでたい）といった正月のお祝い料理。



そして、徳利からお鍛さまのお猪口にお酒を注ぐ。やがてお鍛さまからの返盃を受けて、彦弘さんもお酒をいただく。そうして儀式は10分ほどで終了する。

本来はこの後、田んぼに出て鍛を3回入れて初おこしをするのだが、近年は彦弘さんが高齢になり足腰も弱くなったため行われなくなった。

6P：床の間のある奥座敷にお座りになるお鍛さま。右の三つ鍛が田んぼの神様、左の平鍛が畑の神様だそうだ。



6



T01-005

この「お嶽さま」と同様に目には見えない神様をおわすが如く（いらっしゃるかのように）もてなす行事が、宇奈月町下立（おりたて）の「おーべっさま迎え」だ。おーべっさまは、えびす様のことで漁師町では豊漁の神様と崇められているが、黒部川周辺の農村部では稼ぎの神、行商の神、商売繁盛の神として崇められている。

下立では年の暮れが近づく11月20日に、出稼ぎに行っていた自分の家のえびす様がたくさんお金を稼いで帰って来るので、夕方になると玄関を開け、ご馳走を用意してお迎えする。

昔はえびす様は電車に乗って帰って来るということで提灯を持って下立口の駅まで迎えに行き、お風呂を沸かし、それから食事とお酒でもてなした。

9P上：出稼ぎから帰るおーべっさまを玄関でお迎えする、宇奈月町下立の此川邦夫さん。

9P下：目に見えないおーべっさまを風呂場にお連れし、頃合いを見計らってご馳走を並べた神棚の下でおもてなしをする。





おべっさまにお酒を注ぐ邦夫さん。御膳はご飯と汁の位置が左右反対の左膳（夷膳）。おべっさまはお正月をゆっくり家で過ごし、1月20日の早朝に出嫁ぎに出る。その時にまた、御膳を用意する。

同じようにおわすが如くに祖先の霊を迎え、もてなすのが芦崎寺のお盆行事、オショウライだ。オショウライは「精霊来」や「お招霊」と漢字を当てる。

8月13日の夕方、松明（オショウライ棒）に火をつけ村の中心に位置する雄山神社より立山寄りの家は布橋を渡った先にある墓地へ、雄山神社より千垣駅側にある家は庚申塚へ祖先の霊を迎えに行く。どちらもこの世とあの世の境界だ。

墓地へ迎えに行った家はお墓の前で松明から提灯に火を移し、ご先祖さまを家に連れて帰り、仏壇の蝋燭に灯す。そして14日、15日と家でゆっくり休んでいただき、16日の早朝に布橋までお見送りする。

奄美大島のお盆行事もよく似ている。奄美は旧盆で旧暦の7月13日にお墓まで提灯をぶら下げて祖先の霊を迎えに行き、15日に再び提灯をぶら下げてお墓へお送りする。神道では亡くなって30年～50年で祖霊（神様）になると言われている。

神を迎え、神をもてなし共食し、神を送ることが
祀りの原点だろう。奄美や沖縄といった琉球弧は祖
霊信仰、ウナリ神信仰、ニライカナイ信仰だが、纏
めれば琉球神道となる。その儀礼は神迎え、神アシ
ビ（遊び）、神送りだ。

目には見えない神様を提灯を持って迎えに行く、
あるいは獣を神様に見立てるといってユーモラスに
も思えるが、神社に祀られている神霊も依り代、神
籬（ひもろぎ）。鏡であったり、石であったり、御
幣であったりを神様に見立てている。神社から神社へ
神霊を勧請（分霊）する時には、御幣が依り代と
なって移動する。

沖縄で一番ポピュラーな神様である火神（ヒスカ
ン）は、竈（かまど）の石だ。個人的には神道とは
宗教というよりも、信仰だと思っている。ある神職
の方は「神道は生活そのもの」ともおっしゃる。

そうして考えると「お鍛さま」や「おべっさ
ま」「オショウライ」の中に、祭祀の原風景が見え
るのではないだろうか。





13P上：芦峠寺のオショウライ。家の前で松明に火をつけ、布橋の先にある墓地へご先祖様を迎えに行く家族。

13P下：夕方の墓地は、ご先祖様を迎えに来た人たちで賑わっている。

14P：墓地からご先祖様をお連れして、行燈の火を仏壇の蠟燭に移す男性。

15P上：芦峠寺集落を貫く大通りには、庚申塚や墓地へご先祖様を迎えに行く人たちが持つ松明の炎が揺れていた。

15P下：庚申塚へご先祖様を迎えに来た家族。





16P上：奄美大島の旧盆。旧暦の7月13日に提灯を持ってお墓へ先祖の霊を迎えに行く。

16P下：旧暦7月15日に再び提灯を下げて先祖の霊を墓地までお送りする。

17P：旧正月の沖縄・久高島。外間殿にある火神（竈の石）に、平御香（ひらうこう）が供えられている。

○山・鉦・屋台百景

・降臨した神霊を乗せて巡行する曳山

高岡の御車山祭、魚津のたてもん祭り、城端神明宮の曳山祭りが2016年11月30日に、ユネスコ無形文化遺産に登録されたが、富山にはこの他にもたくさんの曳山や屋台の登場する祭りがある。

山・鉦・屋台とは山車（ダシ）と呼ばれる祭りの為の装置で、ここに神が降りたり、この装置を使って神を迎える。

日本の祭祀では古くから樹木や山に神霊が降りる（松飾りは正月神を、七夕の笹竹は祖霊を、立山は山そのものが霊山であり、二上山は二神だ）とされているが、山車はまさに字の如く神が降りる山を模して造られた装置に車輪を付けて巡行出来るようにしたものだ。

富山の曳山のほとんどは江戸時代に造られている。以下、各祭りの公式サイトや観光ガイド、Wikipediaなどを参考に簡単な年表にしてみた。







19-21P：土蔵造りの屋敷が並ぶ山町筋を
巡行する御車山。

22P：御車山の巡行では、安永4年に起きた
曳山騒動で御車山の由緒を守り獄中死した津幡
屋与四兵衛の顕彰碑の前で全ての御車山が立ち
止まり参拝する。

富山で一番最初に造られたのが高岡の御車山で、
前田利長公が高岡城に入城した1609年と言われ
ている。

新湊の曳山祭りは1650年に古新町が曳山を創
設したのが始まりとされる。

氷見では1679年に上日寺の境内にあった日吉
山王社の3月の祭礼に南北の両町が恵比須と大黒を
本座とする曳山を製作している。しかし曳山巡行は
直ぐに中止となり、現在は本座に飾られていた恵比
須と大黒様が上日寺のゴンゴン祭りの日に飾られて
いる。祇園祭の曳山の起源は定かではないが、18
29年には南10町の曳山が揃って神輿の渡御に供
奉していたという町役人の日記が残っている。

城端の曳山は1719年の秋祭りに曳山が完成
し、1724年から神輿の巡行に曳山が供奉す
る。

魚津のたてもんは、1720年頃には台の上に提
灯を吊るし担ぎまわしていたとされる。

越中八尾の曳山は上新町が1741年に花山車を
製作したのが始まりだという。



24P：新湊で一番最初に造られた古新町の曳山。曳山の巡行順はクジで決まるが、古新町だけは別格で一番山を務める。

25P：新湊の曳山は昼は花傘を付けた花山、夜は提灯を付けた提灯山になる。



26P上：神仏混淆の時代、上日寺の境内にあった日吉山王社（現・日吉神社）の祭礼に造られた曳山の本座人形が、現在は上日寺のゴンゴン祭りの日に飾られている。本座人形は恵比須様と大黒様で、写真は恵比須様。

27P上：氷見祇園祭の曳山は、現在5町が出している。両側に露店が並ぶ道を、曳山が行き交う。

27P下：庵屋台と曳山が各町ごとに連れ添って巡行する、城端の曳山祭り。

28-29P：提灯を下げて細い路地を庵屋台と共に巡行する、城端の曳山。







30



30P：ほぼ組み終わった、たてもん。
31P：くじ引きで順番を決め、1基ずつ境内
に入って約5トンのたてもんを回転させる。終
るとたてもんを社殿の前に移動し町内関係者は
拝殿でお載いを受ける。

31



32



3 2 P：越中八尾の曳山は屋根の付いた屋台様式で、屋根四隅に瓔珞（ようらく）と呼ばれる装身具が掲げられ、車輪にも美しい彫金が施されている。

3 3 P：提灯山となった山車が、八尾の坂道を連なって上がってくる。

33

石動の曳山は1752年に御坊町が造ったものが最初だそうだ。

四方の曳山は江戸中期に6基の曳山で始まったそうだが、1945年に起きた大火で焼失。その後小型の曳山が造られて復活した。

出町子供歌舞伎は、1789年に造られた西町の山車が始まりという説が有力だそうだ。

岩瀬の曳山は、西岩瀬の人々が1658年に神通川の氾濫により東岩瀬に移住し、翌年に西岩瀬の諏訪神社の分霊を勧請する際にご神体に伴って井桁に組んだ神社建築資材を運んだ姿が元とされていた。しかし現在は、1792年の大火で東岩瀬のほとんどを焼失したが、その後に復興を果たし、そのお祝いと災難を祓うために1796年より山車にたてもん（行燈）を乗せて引くようになったとする説が有力という。

けんか山で知られる伏木の曳山は1813年に現在の場所に伏木神社として遷座された際に、神幸供奉のため曳山が創建されたといわれる。





3 5 P上：石動の曳山は花笠を付けた花山で、
1 1基が引きまわされる。

3 5 P下：巡行を終えると愛宕神社の御旅所が
ある商工会館前に1 1基の曳山が勢揃いし、ラ
イトアップされる。

3 6 P：高さ3～4mほどの四方の子供曳山。



3 7 P：出町子供歌舞伎は東、中町、西町が輪
番で担当する。2 0 1 8年は東が担当で「絵本
太功記十段目尼崎の段」「釣女」の2本立て
だった。

3 8 P：初日の4回目の公演だけは担当町の歌
舞伎山車を真中にして3町の山車が揃う。

and more...